

基調講演「北海道のアイデンティティを確認するための地域アーカイブという考え方」

講師：東京大学名誉教授 根本 彰 氏

1. 概要

アーカイブとは過去を再現するための手がかりのことである。近年北海道ではウポポイ(民族共生象徴空間)の開設を通じて、多民族共生という見方が強調されるようになった。他方、昨年より国立国会図書館はナショナルなデジタルコレクションを国内でどこでも誰でも登録すれば閲覧できるサービスを開始している。これはかなり革新的な、今までなかったようなツールである。デジタルコレクションは、今まで個々の図書館がサービスしてきたものを統合するような、日本の図書館の一つの新しいインフラを形成し直したのではないかと考える。



こうした新しい状況において、北海道の図書館は何ができるのだろうか。北海道は内地と比べても、図書館がもつ可能性を存分に展開させてきたと考える。それは、土地に縛られた人間関係を基にしたものとは別の、開拓者ないし開発者の思想があったからではないかと考える。この思想は、基盤的なところに残りながらも、新しいものが積み重なっている段階で、再評価し直す動きにつなげられないかと考えている。

昨年、「マージナルな歴史的記憶を負荷された地域アーカイブ研究」という研究を始めている。取り上げたのは沖縄・北海道・福島という三つの地域で、一口にマージナル(marginal:周辺、境界にある)と言っても意味合いはそれぞれ異なる。北海道も、特に北方との接点という意味でマージナルであった。この研究の考え方を基にして、アーカイブとは何かということと、アーカイブの公的な機関として重要な図書館・文書館・博物館などの関係をお話したい。

2. アーカイブとは何か

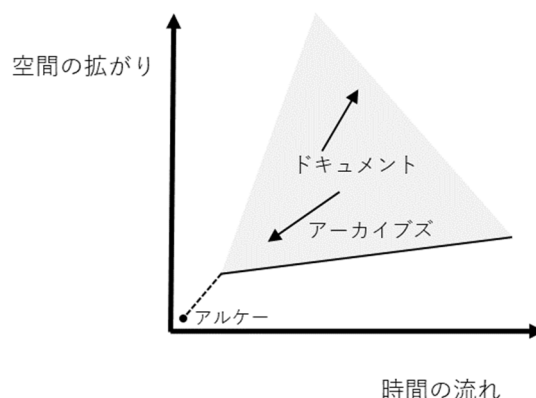
(1) アーカイブとは何か

アーカイブとは「後から振り返るために知を蓄積して利用できるようにする仕組みないしはそうしてできた利用可能な知の蓄積」と定義した。なぜかというと、アーカイブズのアーケ(arch-)という語幹が持つ意味合いが非常に重要だと考えたからだ。アーケの大元になるのは古代ギリシア語のアルケー(αρχή)という言葉で、古代ギリシア哲学者が追求した概念としてよく出てくる。始原とか最初のものという意味で、この世界の最初は何であるということを追及しようという非常に哲学的な問いである。アーカイブというのはアルケーを表現するものという意味合いなのだが、このアルケーは始原、最初のものという意味から、第一のもの、一番トップという意味合いに転じる。そして、権威とか権力とか、政治に関わる用語としても使われる(monarchy:君主制、hiearchy:ヒエラルキー、anarchy:無政府状態など)。この三つの意味をつなげて考えてみると、アーカイブには結局「最初のものであることで権威、権力の源泉になる」という意味合いがある。なぜアーカイブズという文書館のようなものが必要なのか。法律を作る、契約をする、外交関係を結ぶといった何か新しい力が働く時に文書が作られるわけで、その文書は最初のものであり、権威・権力を示すものである。これを残すということは非常に重要だという考えが、西洋思想の中では非常に強くある。なぜならば、民衆から見た証拠という意味合いと、権力者から見た権力の元という二つの意味合いがあるからである。

(2) アーカイブズとドキュメント

図書館情報学或いは図書館との関係でいうと、このアーカイブズとドキュメントという言葉を区別する必要がある。ドキュメントは「文書」と言うことが多いが、図書館情報学では通常ドキュメントとは、ある考えを広める仕組みであるとしている。アルケーというのは時間の流れと空間の拡がりの原点にあり、アーカイブズというのは、一番原点にあるアルケーに向かっていくものである。アーカイブズという機関は、このアルケーを明らかにするための機関で、歴史家は常にアルケー(原初)が何であるかを明らかにしようとする。アーカイブズというのは、そういう意味でも、この原点に向かうものである。

ところがドキュメントというのは、基本的には外に向かっていく。図書館で言えば、印刷したものを受け入れて、それを誰かに閲覧して見てもらうという行為を指す。文書館も、原点のものは一番重要なものとして一定期間は保存して公開はせず、一般の人にはレプリカやコピーを見せるというようなことをするが、そのコピーが「ドキュメント」である。そういう意味で、この「ドキュメント」は拡がっていくという意味合いを持つ。歴史家がドキュメントというときは、アルケーに近いアーカイブズを収録した本や資料集のことを言っており、それは外向きのドキュメントだと考えてよい。この区別を明確にしておく必要がある。



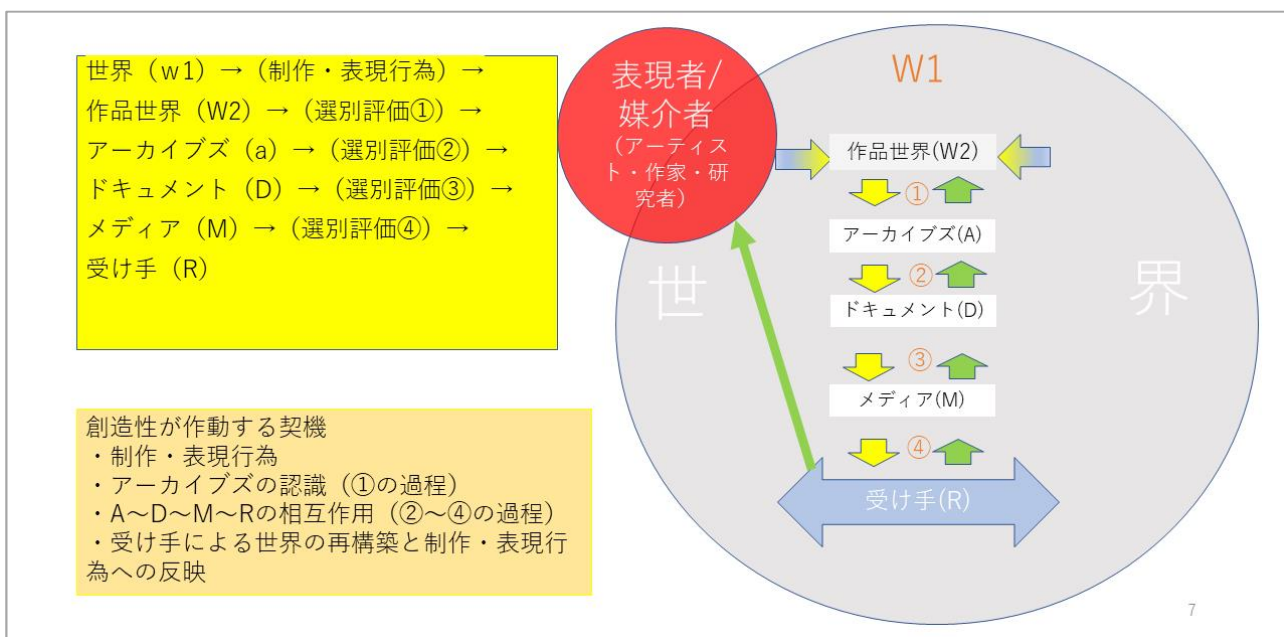
(3) アーカイブの創造性とは

作品世界の表現者や媒介者という、アーティストや作家、研究者などが挙げられるが、誰でも創造はできるので、図書館の利用者である一般の市民でも、自分の研究テーマがあって、何かを明らかにしたいという人はみんな「表現者」となりうる。文部科学省(文部省)も、1980年代ぐらいから欧米の学び方に倣って、学習指導要領を少しずつ改訂しようとしてきた。2017年に明らかになった学習指導要領は、「探究」という言葉を積極的に使っている。学校図書館を使った学習についても書いてあるが、探究学習を本格的にやることは、今までの学びと全然違う学びである。インターネットにつないで情報を検索すれば探究になるわけではない。レファレンスサービスを中心にして媒介のプロセスがいろいろ必要で、そのプロセスがうまくいけば、学校図書館であろうが、公共図書館であろうが、どういうところでも最終的には自由研究や探究学習が可能になり、新しい創造的なものに繋がる。探究学習はそれをねらっているはずなのだが、こういう途中のしかけをしないままに、学校図書館の活用といっても、一体何ができるのか。職員の確保やデータベースの導入などのために予算措置等が必要だということを言うために今、基礎研究をしているところである。

アーカイブの創造性をモデル化した次の図を見ていただきたい。我々が住んでいる世界を何らかの形で自分で表現する。それは絵を描く、小説を書く、詩を書く、研究して論文を書くなど何でも良いが、その書かれたものが作品世界である。アルケーは、その世界にあたる。アルケーは見えない。自分が何かを追求してアルケーを表現するという行為があってドキュメントができる。そして、そのプロセスでは、何らかの意味での選別評価が行われる。例えば、自分が描きたい世界を絵に描く。描いた絵がアーカイブズであり、何枚も描いた中から本人が一枚を選別し、先生に提出する。提出されたものの中から、いいものは展示しようとか、発表させようとか、図書室に置こうとか、先生が選ぶプロセスでドキュメントができる。図書室に置けば、時間的にも空間的にもたくさんの人が見て、拡がるという意味でドキュメントである。これが本当に多くの人が見る価値があるものと認定されれば印刷されて配布されるとか、デジタル化されるというプロセスでメディアになり、それを最終的に受け手が見て、学んで、次の表現者

に何らかの影響を与える。アルケーの抽象的な世界が作品になり、選別されて、受け手に渡る。誰かが書いたものが、自分の何かに影響し、それが次の表現行為を生み出すという循環は、受け手による世界の再構築と制作・表現行為への反映という意味で、創造性である。芸術家も、全く何もないところから生み出すというよりは、他の表現行為などを見ながら学び、次の何かを生み出していると言える。

アーカイブのプロセス図では、創造性は上向きの過程(緑色の線で示した)で生まれる。受け手によって、次の世界の表現・創造に繋がるプロセスがうまく作られることが大事である。その時に、媒介者である司書、学芸員、アーキビストの専門性とは何か。選別や媒介のための知識やスキルは、かなり共通性もある。特に今後、財政的に厳しくなる状況で、人的な配置等も含めて全体的な専門性をどのように確保するかの議論が必要になるだろう。次にそのことを考えてみたい。



3. アーカイブ施設としての図書館、博物館、文書館

(1) 集合的記憶の保持のアーカイブズ機関

アルケーという世界がどのように表現され、ドキュメントやメディアになっていくか、そのプロセスを、図書館やアーカイブズの機能として考えてみたい。ドキュメントの行為については、原点として誰かが体験し、個人の記録が記録物になり、さらに伝聞されたものが取材され分析・研究されるというプロセスになる。報道・出版されれば、図書館が受け入れることが可能になる。ただし、図書館は出版物を受け入れて整理して提供するというのが一般的な考え方だと思うが、それだけではない。場合によっては、体験が次の記録に繋がるわけで、つまり、体験や記憶、個人の記録抜きにドキュメント行為はできないはずである。つまり、図書館が提供したドキュメントがそれを受け取った人のドキュメント制作行為に結びつくことを前提としたサービスが必要だということである。このような過程におけるすべての行為を意識しながらサービスを展開することが、図書館にとって本当は必要であるし、本来はそういうところから出発しているはずである。けれども、今の制度化された図書館では、出版リストからチェックして本を集め、受け入れて、目録をとって書架に出すという、そのプロセスで終わっているのではないか。本来それは何のために行っているかと言ったら、体験を伝えるためだろう。或いは、アーカイブを再現して創造性のサイクルをつくるための手伝いである。利用者が表現者・媒介者となるはずのサイクルが、なかなか見えにくくなっている。

その点で、専門図書館の役割が極めて重要だと考える。専門図書館が一番、媒介者を意識しており、他の館種はその辺が見えなくなっているのではないだろうか。あるいは後で述べるように、私設図書館に見られるような創設者の設置意図を活かした運営がもっとあってもよい。

ともかく、アーカイブズとドキュメントは厳密に分けられるわけではない。博物館、文書館、図書館も排他的ではないし、実際かなり重複している部分がある。同じような資料をもって、本来はかなり近いことをやっているということをもう一度思い出したい。その上で、資料のアーカイブ性とドキュメント性は区別して考える必要がある。これは両方とも非常に重要で、私は教育とアーカイブの話は表裏だと考えている。教育は、アーカイブを参照しながら学ぶということが重要になる。図書館はパブリックセクターとして、税金を投入してきちんとしたインフラを長期的な見通しのもとに作っていくという、全体の見直しが必要だと考えている。

(2) 文書館、博物館・美術館、図書館の役割

文書館、博物館、美術館は作品世界が受け手に伝わるまでのプロセスにおいて、最初の選別評価過程から関わる。最初の選別評価は作品を作るプロセスに関わることで、アーカイブズ→ドキュメント→メディア→コレクションという選別評価の過程が、文書館や博物館、美術館に関わる部分である。図書館は常に複製物を扱っているのに対して、博物館、文書館は基本的にはオリジナル、先ほどの言い方だとアーカイブズを扱うということが特徴である。図書館は、アーカイブズの選別評価は弱くて、ドキュメント以降の選別評価に関わってきたと言える。

文書館は、歴史家の視点・国家運営者の視点や、コレクションの蓄積保存、展示・図録といったものを、選別評価の過程で考えてきた。また、博物館・美術館は、学術・美術の水準や学芸員によるコレクションの蓄積保存、展示・図録ということ、評価の視点として積極的に考えてきた。そして、図書館の評価の基準としては、出版という行為自体には積極的に関与しないというスタンスがあり、学術コミュニケーションや出版者に依存してきたように見える。特にコレクションを作るところで、自らの評価の視点を作ってきたと言える。

欧米ではMLAの代わりにGLAMということが多い(G=gallery 美術館)。こういうところで世界を表現するという考え方は、西洋思想の中になんか濃厚にあるものである。これはラテン語でhumanitas(人文主義)という、古代ギリシア・ローマにさかのぼって文献を読み直すところから西洋の近代が始まるという考え方が非常に濃厚にあったからである。15～17世紀くらいに強くあった考え方で、西洋の都市或いは大学にある図書館や博物館・美術館がもっとも基本的なインフラであるという考え方は、このhumanitasからきている。

日本はこれを無視してきたということが言える。みずからの思想の根源が何にあるか、どこにあるかを、古典や思想的なものに学んでいこうという考え方が、日本でも江戸時代までは強くあった。日本は日本で、類聚とか類書といった出版物や国学考証派のような古典に学ぶ学問があった。知を蓄積して利用するという考え方があったのだが、明治以降にうまく繋がらなかったのである。日本は近代になって、西洋を真似しながら進んできた。その時に自らのアーカイブの存在を無視しがちであったということではないか。

北海道の開拓の思想について触れたが、やはりそこで開拓使を支援したアメリカ人の影響が非常に重要ではないか。初期のアメリカという国は、ヨーロッパのコピーであり、近代しかない。北海道とある部分、よく似ていると言える。もちろん先住民がいたのだがそのことはここでは措いておく。アメリカが国づくりをするときに、西欧の建築や都市計画だけでなく、知的コンテンツをそのまま持ってくる手段として図書館と博物館・美術館を利用した。日本も真似をした部分もあるが、自らのものにならなかった。だから、北海道大学が西洋的な学術を導入する時にデューイ十進分類法を使って学術水準をそのまま持ってきて、現在もその分類法が残っているというのは、非常に面白い話であるし、これは開拓の思想

に繋がるのではないか。

日本では、前近代から近代になるときに大きなギャップがあったが、アメリカはそれがうまく繋がった。日本でアーカイブという考え方が弱かったことが何をもたらしたか。私は教育の問題や日本人の創造性に影響があったと考える。高度経済成長期までは、日本の、特に江戸時代まで持っていた物づくりのスキルが非常に重要で、外国のテクノロジーを真似しながら導入することにつながった。それで 1970～80 年代には世界に冠たる技術大国になったのだが、そのあとが続かなかった。この創造性の問題は、私はアーカイブの点が大きいのではないかと考えている。それはスキルが思想につながらず、他方でもっていたアーカイブの思想が置き去りになっていたからである。

4. 地域アーカイブを探る研究課題－マージナル・フクシマを例として－

(1) 明治以降の福島的位置づけと東日本大震災がもたらした被害

福島県は江戸時代まで、会津藩が徳川家とゆかりのある非常に大きい藩だったが、戊辰戦争で負け、疎んじられたと言われている。少なくとも、会津の人たちにはそれを忘れないという掟のようなものが伝えられているようだ。

一方、東日本大震災で津波に襲われた浜通りは、不便なところが多い。山がせまっていて、ちょっとした平地を使って人が住んでいる。だからもともと人口が少なく、開発の一環として原子力発電所を誘致したわけだが、結局事故になって非常に大きな問題になった。東日本大震災が地震、津波、東電原発事故、この三つの巨災をもたらしたのである。

(2) 福島では歴史や震災をどのようにアーカイブ(表象)しているのか

基本的にはドキュメントをどのように表現していくかということになるが、国の方針としては、2011 年 5 月、地震や津波があった 2 か月後にはすでに「復興構想 7 原則」というものができている。その一番最初に、「失われたいのちへの追悼と鎮魂」という言葉を使って、アーカイブ的なものを重視することが言われている。これには鎮魂ということもあるが、復興するためには、何が問題だったのかということの資料をちゃんと残そうという意図も含まれている。鎮魂の森やモニュメント、記録、科学的分析、次世代への伝承といったものが掲げられ、災害伝承施設が東北の被災地全体で 2022 年 10 月時点で 300 施設ほど作られている。太平洋岸で津波があつて家屋が全部壊れてもう人は住めない状態になったところが、鎮魂の森や公園になって、その一角に伝承施設を作るといったケースが多かったが、福島だけは遅れていた。

福島県立博物館は、県内では西側の会津若松にある。関係者の歴史的な思いを、何らかの形で表現しようという意図があつたのだと思うが、表現するだけでなく、それをアーカイブ化してみんなで再評価しようというのが博物館の役割である。3.11 以前は歴史的な展示が多かったのだが、東日本大震災以降は、様々な大震災をテーマにした収集や展示企画が始まっている。図書館については、図書館自体が津波にあつた後、資料を復興させるために全国からたくさんのボランティアが手伝うといったところから始まり、福島の場合は県立図書館や市町村立図書館が、それぞれの立場で東日本大震災の別置コレクション、展示、書誌、デジタルアーカイブ等の事業を行っている。図書館のこういった事業で、一体何が表現できるのかということは、これから明らかにしていきたい。

県立博物館とは別に、県は 2020 年に東日本大震災・原子力災害伝承館を開設した。博物館が着手した事業を現地で引き受けて展開しようする意味合いがある。博物館が全体の事業の一環で被災資料等も含めて収集から保存、展示企画を行っていたのに対して、こちらは最初から震災、津波、原子力事故をテーマにする点で違いがある。県の方針をそのまま反映させざるを得ない立場にあり、原子力事故の処理はまだ途上にあることから難しい判断を迫られる場合もあるようだ。

(3) 運動的アーカイブ

3.11 に関わって、事故地の周辺にできた立場が異なる民間のアーカイブ施設を紹介する。

① 東京電力廃炉資料館(富岡町)

東京電力が廃炉資料館というものを作っている。3.11以前は東電の原発の広報施設だったものだが、今は廃炉資料館となり、基本的には博物館的な展示ではあるが、事故に対する謝罪と廃炉のプロセス、地域との関係づくりへのメッセージも見ることができる。

② リプルンふくしま(環境省)、中間貯蔵工事情報センター(環境省、JESCO)

環境省が、放射能による土壤汚染に関連して、土の処理について展示施設を作っている。

③ ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館(檜葉町宝鏡寺)

原発基地の近くにあった宝鏡寺の和尚さんが建てた施設で、反原発という立場をかなり明確に打ち出している。

④ ふたばいんふお(富岡町)

地域ボランティアによる集会・展示施設である。少しずつ住民が戻ってきているが、地域や職場での情報交換が途切れていた中で、意識的に、個人のお金で作った施設であり、だれでも自由に入ることができて、パンフレットが置いてあったり、写真が展示してあったりする。住んでいる住民が、互いに交流するための施設と言える。

このようなアーカイブ施設ができており、目的が明確なほどメッセージとしては鋭いものが発せられる。廃炉資料館に行ってみると、大変大きな問題の中で、ドキュメントとして示せる部分ではできるだけ示していこうという東京電力のスタンスを感じることができる。基本的に広報施設ではあるが、メディアを通じてではなくて、やはり場所を造ってその場で展示するという方法は、決してそれで説得されるという意味ではないが、いろいろ学びになるものである。

あと 50 年くらい経つと、300 もできた伝承施設はどうなるのか。現時点ではわからないと同時に、どういうメッセージを発していくのかというのが難しい。とくに原子力事故処理についての判断についてはいろいろな政治的立場があるから、例えば 50 年経って原発がどのように伝えられるかを想定した計画が必要である。次に北海道のアーカイブ施設に何ができるかということを考えてみたい。

5. 北海道のアーカイブ施設をどう見るか

(1) 北海道のアーカイブ思想を探る

北海道のアイデンティティとは何か。開拓、北方への入口、マージナルという言葉を使ってきたが、例えば北海道大学にはスラブ関係の研究施設と図書室がある。ロシアや旧ソ連、東欧関係に対応するために、一番の前線基地として北大に施設を作るということであっただろう。ほかにもアイヌとの関係、民族文化を「見せること」の意義を考えたい。

ウポポイ(民族共生象徴空間)の機能を考えるとき、これまで日本では多民族(文化)共生という考え方が弱かったがそれを前面に出した施設と言える。政治的に異なる意見はあっても、一応、日本という国家レベルで新しい法律を作ってナショナルなレベルでアイヌとの関係を表現した結果が、ウポポイという施設ではないか。アメリカの首都ワシントンにある自然史博物館では、1990 年代にまだアメリカンインディアンズは展示対象の「自然」として残されていたが、同じ頃に、それを見直して政治的・制度的に再度位置づけ直して、National Museum of American Indians を開設している。それでもなお、博物館がある種の観光地になっているという批判、神聖なるものであるはずの祭祀の道具が観客の目

にさらされていることに対する批判があり、これはおそらくアイヌの展示でも同じことが言われていると思われる。

アーカイブズ展示の場としての博物館はその意味で判断が難しい問題が起こりやすい。むしろそうしたアルケーを表現して来館者に考えてもらうことに意義があると言える。

(2) 市立函館図書館と岡田健蔵～函館、天理、野田の三図書館～

まず、函館の岡田健蔵(1883～1944)は、特に郷土資料、アイヌ関係資料、北方資料の収集を私財を投じて行い、他の追随を許さないコレクションを築いた人物である。極貧になり図書館で生活したなどの逸話を持つ人で、有名な植物学者牧野富太郎と似たようなイメージを持つ。開拓の時期に、新しい世界が開けたという純粋なる好奇心なのかもしれない。情熱をもって私財を投じ、全生涯を傾けた人というのは、どの分野にも常にいる。

一方、天理教 2 代目真柱の中山正善(1905～1967)という人は大変な学究肌で、東京帝国大学文学部宗教学科を卒業している。指導教官であった姉崎正治(姉崎嘲風)は、東大図書館長を務め、関東大震災で被災した同大学図書館の再建に尽力した人物だが、宗教学者として、教典管理という意味において宗教と図書館が密接な関係を持っていることを伝えた人でもある。文部省の初代の学校図書館担当者である深川恒喜も同じく宗教学出身で、やはり文献管理を重要視していたことが学校図書館行政に力を入れた理由だったことがわかる。天理教は戦前はかなり弾圧され、移民のいたブラジル、台湾や朝鮮といった植民地、ほかに東南アジアや欧米にも進出して国際的な展開をねらった。中山は天理図書館を作り、文献的な根拠で宗教戦略を立てるという考え方を持っていた。また、天理参考館という民族博物館も作られ、世界各地の支部から送られた珍品を展示し、それを使って国際戦略の教育をする役割を果たしていた。図書館や博物館というものを、宗教戦略の一環に位置づけている、非常に変わった考え方の持ち主だったと言える。

函館図書館と天理図書館は、古書店に新しい資料が出るといつも最初に入札する。そのように競争的にコレクションを作ったという話もある。文献収集という方法で新しい世界を把握して見せようとしたのである。

千葉県野田市はキッコーマン株式会社が本拠を置いているところで、会社の文化的な財団と言える興風会がずっと図書館を作っていた。今は市立図書館になっているが、そうなったのは戦後だ。函館市立図書館で1930年から司書として岡田を支えて資料収集等を行っていた佐藤眞が、1943年に野田の興風会図書館に呼ばれている。彼の前任として野田にいたのが、分類や目録の大家である仙田正雄で、戦後は天理図書館司書を務めた。この三つの図書館は全部私立図書館だが、非常に熱心に様々なことに取り組んでいた。

私設図書館は博物館や美術館と似たところがある。それは創設者がアルケーに近い貴重資料を集めようとするところである。ただ、それだけだと個人的な趣味の延長になってしまう。これをその価値を理解しながら公共的な場で見てもらうのか、が問われることになる。

6. アーカイビングとキュレーション

プッシュの情報とプル情報を対照的に示す概念がある。インターネットは、一方的に情報を送り届けてくる「プッシュの情報」だ。自分の意思で検索したつもりになっても、たいていは多くの検索結果の中から、上の方に表示されたものしか見ないから、プッシュされていると考えたほうがいい。大事なものは、やはり自分が主体性を持って選ぶということで、受け手が次の創造者になるためには、このプロセスをうまく作っていく必要がある。自分が自分の意思でプルをする、受け手による選別の余地が大きい方法として大手書店や新聞、私蔵書、図書館を挙げておく。これらは今では一昔前のメディアとされることが多いが、そ

の理解は違うと考えるが、問題は「プッシュ」と「プル」の間をどのように調整するかである。書店なら棚揃え、新聞なら編集、私蔵書や図書館なら資料の収集方針と組織化である。

アーカイブを用いた探究(リサーチ)やそのための情報リテラシーの重要性の根拠はここにあり、利用可能にするためにはアーカイブ装置の広さと深さを確保し、そしてプッシュとプルの仲介をする場が必要である。プルの情報という時には、図書館もキュレーションをもっとするべきだ。書庫にしまっているものは、よほどのことがないと使われることはない。美術館、博物館でキュレーションを積極的にやるのと同じように、図書館もするべきではないだろうか。キュレーションとは、情報を特定の視点を持って収集、選別、編集することで新しい価値を持たせ、それを共有することである。図書館が先ほどの循環図の中で、ドキュメントからコレクションに至る部分をキュレーションすることで、ライブラリーの創造性が可能になる。これはなかなか難しいかもしれないが、先ほどの三つの私設図書館は成し遂げたのだ。キュレーションは、公立図書館・大学図書館・学校図書館の活路となりうる。

アーカイビングとキュレーション*

- アーカイブズを「見せる」ときに生じる論点
 - そもそも「見せる」ものなのか
 - アーカイブズのもつ価値は伝わるのか
 - 「見せる」ための方法は適切なのか
 - 「見せる」ことのもつ集客効果もたらすもの
 - 「見せる」ための費用負担をどうするか
- ドキュメントを「見せる」ときに生じる論点
 - アーカイブズをどのようにしてドキュメント化するのか
 - ドキュメントに価値はあるのか
 - 「見せる」方法は適切か
 - 「見せる」ための費用負担をどうするか

7. NDLデジタルコレクションのインパクトと地域図書館

(1) 資料を「見てもらう」こと

国会図書館のデジタルコレクションがインフラになってくると、「古い資料はデジタルコレクションを使ったほうが良い」となってくるかもしれない。自分自身でかなりの情報を“プル”できるからだ。だが、OPACで一体どれだけ検索できるのかという問題がある。NDLコレクションにない資料(地域資料、行政資料、組織資料など)への要求も高まるだろう。だから資料を利用者に「見てもらう」ということが必要で、展示や開架ということにつながる。目録も重要であるし、書誌や索引、パスファインダーといったツール作成の必要性はよく指摘されることだ。利用者教育も積極的にやるべきである。

例えば、野田市立興風図書館では、千葉県地域と哲学や歴史といった主題を選ぶと、クロスさせて検索できるようなツールを、司書が独自にプログラミングした。私は以前から公共図書館のOPACに、ぜひ当該地域だけを検索できる機能をつけてほしいと言ってきた。野田市では司書がそういうツールを作っており、ほかにも地元の地域新聞の記事索引を作ることを毎日行っていると聞いている。

(2) まとめ

国会図書館のデジタルコレクションにより、ネット上の情報に加えてドキュメントのインフラが作られつつある。個々の図書館はこのインフラを基準にして活動を行うことになるが、20世紀の後半ぐらいまでの資料がある程度デジタルで入手できるとなれば、それ以降のものをきちんと提供できる体制があるかということが問われるようになる。

そして、地域的なものが同等のレベルで入手できるかということも問われるだろう。地域アーカイブを図書館で実現するためには、目的を明確にして資料・情報を収集し、それを見えるようにすることが重要だ。函館図書館・天理図書館・興風会図書館は目的が明確だった。目的のために整理技術が非常に重要だということを意識して、彼らは関わっていたと思う。

北海道については、非常に濃いコレクションを持っている図書館であっても、あまり外からは中身が

よく見えない。持っているコレクションを解釈して、何をどのように使っていくかを示す。この点で、やはりライブラリアンがキュレーションをする必要がある。

「見せる」ためには、今まで以上に目録、索引、書誌、展示、レファレンス、利用者講習、デジタルライブラリーといったものの手法を駆使しなければならない。知の宝庫と言われるが、利用者は書庫には普通なかなか入れない。書庫ツアーを行うなどの方法で利用者に見えやすく、透明度を高くすることにより、北海道のアーカイブ機関が地域アイデンティティの構築につながっていくのだ。そうすることにより市民が宝庫から知を「プル」することができるようになる。また、学校で探究学習が始まっているときに積極的に関与することで、未来の図書館の利用者を育成することが可能になる。

参考文献

石川徹也・根本彰・吉見俊哉編著『つながる図書館・博物館・文書館：デジタル化時代の知の基盤づくりへ』東京大学出版会, 2011, xiv, 272,8p.

根本彰『アーカイブの思想－言葉を知に変える仕組み』みすず書房, 2021, 296, xiii p.

根本彰「7 章 図書館の地域アーカイブ活動のために」蛭田廣一編『地域資料のアーカイブ戦略』日本図書館協会, 2021, p.116-155.

根本彰「知のアーカイブ、歴史のアーカイブ：ニュートン資料を通してみる」『アーカイブズ学研究』No. 37, 2022.12, p.4-18.

根本彰「地域アーカイブの実践を福島に見る：集合的記憶をさぐるための方法的検討」『日本の科学者』vol.58, no.5, 2023.5, p.4-10.

参考 URL

函館市立図書館 https://hakodate-lib.jp/hometown/h_library

函館市立中央図書館デジタル資料館 <http://archives.c.fun.ac.jp/fronts/top>

天理図書館 <https://www.tcl.gr.jp/about-us/>

野田市立興風図書館地域資料カテゴリ検索

[https://www.library-noda.jp/homepage/info/NDC tree/localopac.html](https://www.library-noda.jp/homepage/info/NDC_tree/localopac.html)

三つの私設図書館と「舌なめずりする図書館員」

<https://oda-senin.blogspot.com/2023/07/blog-post.html>

北海道の図書館アーカイブ探究の旅

<https://oda-senin.blogspot.com/2023/09/blog-post.html>

WebOPAC と新聞記事検索ツール：野田市立興風図書館のサービス

<https://oda-senin.blogspot.com/2023/07/blog-post 17.html>